

第三百七十五回 青葉会

平成二十九年六月二十二日(木)

午後五時半〜八時半 文京区民センター

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 星田啓子
山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄
山崎亜也 山田けい子 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明
MH氏 村田くに子 山本三恵

《互選句》

六点

◎ 泣くまいと迷子の我慢立葵
☆◎ 欄外に一句添えあり夏便り
(☆↓「欄外に夏の一句や友の文(よき)」)

☆ 闇深し胸にまつすぐ螢入る
(☆…「入る」↓「入り」)

五点

◎ 万物を墨絵となして白雨かな
☆ 遠雷や余命を洩らす無二の友

四点

☆ 河童絵の団扇(うちせ)ピアノに飾りをり
(☆↓「河童絵の団扇をピアノに飾り在り」)

☆ みちのくの友の便りはさくらんぼ
(☆↓「みちのくの友からさくらんぼ便り」)

☆ 洗はれて谷中生姜のほんのりと
(☆↓「洗ひあげほんのり紅き谷中生姜」)

☆ 駒を打つ少年の指青嵐
☆ ぬかるみを遊びにする子等梅雨晴れ間
(☆↓「ぬかるみは子等の遊び場梅雨晴間」)

☆ 黒楽(くろらく)に翠(みどり)潜むや風光る
(「楽展」にて) (下五が春の季語の為とらなかつた。↓「風薫る」等)

☆ 峡(かじ)に入る古寺に青き螢かな
(☆↓「峡の古寺青き螢の目覚しく」)

☆ 殿(しんがり)でパス待つ列や枇杷熟るる
天牛 (彦・允・正・三)

三点

☆ 冷酒(ひき) どんどん八十路の友ら意気旺ん
紀久男 (堅・万・龍)

☆ 蒸し暑きミナミ占領華語韓語
全 (猛・敏・く)

◎ 十葉や小さき不満拡がりぬ
孤舟 (猛・彦・敏)

☆◎ 大南風(おおみなみ) 旧邸多き海の町
五郎太 (孤・正・天)

☆◎ 憂さ忘れんとてがむしやらに洗ふ髪
弘子 (万・孤・正)

☆ 奥入瀬に六月のオゾン浴びに行かん
全 (万・ゆ・天)

☆ 沙羅散りし石やはらかに花を受け
ゆたか (万・敏・啓)

二点

- ☆ 紫陽花の一期一会の色に咲く
昇 (堅・五・ゆ)
- ☆ 空豆を剥きつつ母の独りごつ
啓子 (万・弘・ゆ)
- (☆…下五「独りごつ」↓「独り言つ」)
- ☆ 遠雷や書物読みさし空見上ぐ
規雄 (万・龍・正)
- ☆ 籐寝椅子妻には妻の夢有りし
盛雄 (紀・正・く)
- ☆ 雲切れて四片(よひち) (四葩) 輝く散歩道
そらお (紀・万)
- (☆…四葩||あじさいのこと。特に俳句で用いる)
- ☆ 粽(ちまき) 解き孫の活躍ほめあひて
記久男 (弘・敏)
- ☆ 治療とや放射線浴び梅雨に入る
忠彦 (眞・万)
- (☆…上五↓「治療てふ」)
- ☆ 蛇皮を脱ぎてもいまだ爬虫類
孤舟 (万・三)
- ☆ 車庫に売る踏台茶碗籐の椅子
弘子 (万・天)
- ☆ 摩天楼のバベルの塔やはたた神
昇 (眞・紀)
- ☆ 十国を数ふる峠うつぎ咲く(十国峠にて)
啓子 (万・天)
- (☆…下五↓「空木咲く」)
- ☆ 芍薬やほどけてジゼルのチエチエのごと
全 (弘・千)
- (チエチエはバレエのドレスの由)
- ◎ 「遠雷」やガリ版刷の文芸誌
規雄 (孤・龍)
- ☆ 梅雨晴間城の幟は中村座
けい子 (万・三)
- ☆ 桑の実や濃い紫に口も手も
天牛 (万・く)
- (☆↓「口も手も桑の実の濃い紫に」。子供の頃母によく叱られました)

一点

- ☆ 梅雨晴間リユツクを背負ひ寺社巡り
そらお (猛・弘)
- 「お印(しるし)」は木香(もっこう) 薔薇と今満開
全 (猛・弘)
- ☆ 夜明け方何処へ行つたか夏布団
全 (万)
- ☆ 毎年よ父の日贈る大吟醸
全 (万)
- ☆ つゆあけの沖繩こちらついたりとは
孤舟 (允)
- ☆ 落陽を背負ひヨツトの戻り来る
全 (万)
- ☆ 女郎蜘蛛星の電波へ手を伸ばす
全 (五)
- ☆ アロハシヤツ南の花と太陽と
五郎太 (万)
- ◎ 半夏生まだ押すべきか退くべきか
全 (孤)
- ◎ 雲厚く茅輪くぐりの長き列
全 (孤)
- ☆ 天山の風を運びし紅の花
全 (M)
- ☆ 青梅や婦人と藤村並ぶ墓
弘子 (万)
- ☆ 目のやまい体質遺伝や木下闇
健介 (万)
- ☆ 夜を連ね捲(めく)る司馬遼明け易し
堂哉 (紀)
- ☆ 真鶴の浜の白波散紅葉
ゆたか (M)
- ☆ 夏至の朝オスロの湾に家點々
亜也 (万)
- 「水無月」を供す茶席の夏越(なごし)かな
全 (紀)
- (茅の輪くぐりの夏越の祓のあと食する京銘菓)
- 若き日は姑(はは)も笑顔のサングラス
けい子 (彦)
- ☆ 梅雨晴間孫は自転車漕ぎ始む
天牛 (万)
- ☆ 梅雨に入る庭師仕事を終へし日に
全 (紀)
- ☆ ヴェランダのイタリヤトマトにジャズ聴かす
盛雄 (万)
- ◎ 時の日や時には揺れる不整脈
全 (孤)

●次回青葉会

七月二十七日(木) 午後五時半〜八時半 文京区民センター

▲当季雑詠五句 投句二句

八月二十四日(木) 築地「紅蘭(こうらん)」にて暑氣払句会 会費ラ長

以上 文責 紀久男

平成二十九年六月句会報

一 今回は孤舟選者ら8名出席。投句10名。正明さんからの地元句会の句集「新夏草」第二集とお手紙、眞希子さんからのFAX、彦十さんからの絵葉書、そして恭延さんの奥様からのお手紙を回覧しつつ、啓子さんからのマスクメロンと煎餅、弘子さんのクッキー、小生の純吟「獺祭」（深田夫人寄贈）とつまみを堪能し乍ら開始。猛さん披露で御覧のようにけい子さん、弘子さん、健介さんが好成績でした。

話題は保明さんの検診結果、忠彦さんの放射線治療、彦十さんの職場復帰そして社友会HP編集委員会（市村委員長、恵洲さんら六名）からの提案：HPに写真による兼題を出して社友から投句募集。孤舟選者が審査、講評して、優秀3句ほか佳作数点を選定の上、HPに掲載。一部については、加筆添削して、句の趣の変化を楽しむという企画。好評であれば、第二弾、第三弾も実施することも検討することのこと。民間TVで好評の「プレバト」にあやかつて投稿参加者増やして俳句に興味を持つて頂く機会になればという企画の由。：二次会の焼鳥屋でも話題にしましたが、今の処、積極的賛同者は居らず、選者に一任の形。やることになれば及ばず乍らサポートする心算です。

二 関係者近詠

満開の老梅揺らし余震また
 祓処に紅白梅咲く故郷かな
 春寒や音楽室から征きし師よ
 赤蜻蛉肩に実家の露天風呂
 鬼灯を上手に鳴らす戦中派
 蟬しぐれ集中豪雨と交々に
 本閉ぢて猫と抱き合ふ夜長し
 老桜に紛れからすの雨宿り
 軍艦も難民ボートも春の海
 ミサイルの飛びし空をば初燕
 新しき牧師迎へんチューリップ
 前髪をきつちり揃へ枝垂梅
 紫木蓮ほろほろ欠くる大谷石
 日本を見渡してみる桜山
 極彩の門の内なる花吹雪

下欄に続く

万里子 車椅子ことのほかなる花疲れ
 全 花鳥賊の腸抜ける手のこのわが手
 全 鳥雲に後世を親しとおもふ日々
 全 祈ることに倦みしは罪歟四月尽
 全 |「森の座」七月号
 全 人間は一つの宇宙木の落つ
 全 実柘榴や約束事は破られる
 全 毬栗や誰でも少しは自閉症
 全 |「新夏草」
 全 薔薇垣や独りぐらしの老婦人
 全 立ち止まり立ち止まりして蜥蜴消ゆ
 全 諸鳥の声はじけ合ふ梅雨晴間
 全 見え見えの日和見暮し七変化
 全 折合はぬことも合はせてソーダ水
 全 雑念の次元を下げる白雨かな
 全 菖蒲湯や百歳の母孫八才

堂哉

三 「自註・川口襄集」より好感十句 盛雄

短夜を看取りて始発電車かな
 桂馬跳びして陽炎の少女来る
 秋簾父晩年の部屋に座す
 懷妊の知らせを乗せて木の芽風
 木枯しに向かひ駆けゆく柔道着

古本の忘れ葉や釣忍
 木犀や妻と日向を領ち合ふ
 一誌校了し大寒の月仰ぐ
 UFOが濡らしてゆきし七変化
 肩書きも袴も脱ぎのつぺい汁

四 恭延さん追悼句を最近頂戴しました。

朗朗と忘れ難き声冬の星 楠田ヒロミ（彦十）
 賜去りて一枝の震へ残りけり 長谷見 敏
 葉桜や去年の名簿に友ありき 全

平成二十九年七月十九日

紀久男記